# 眞生

第三卷　九月號

□靜に人生の一生を思ふ時、誰人が自己の眞實を望まない者があらうぞ。而て自己の眞實とは即ち自己本心の願いそのものではないか。

□然にともすれば人は自分の本心を退げ、反て自己の眞實を裏きつて、或は肉慾の奴隷となり、或は財慾の奴隷となる。

□乍然何の爲めの肉慾ぞや、又何の爲めの財慾ぞや、我等の一生は肉と財との爲めの一生ではないではないか。肉に亡び財に亡びるは我等の本心の願いではない。

□乍然斯くいへばとて我等も肉欲を欲せない者ではない、又必すしも財欲を退けるものでもない、乍然友よ、そは何の爲めの肉欲であり、何の爲の財欲であるか。むしろ此の肉と財とをして眞に意義あらしむる所こそ初めて人生の眞意義もあるのではないか。

□凡そ此の世に於て何が最も樂しいといつても、自己の身命を献げてもやらずにはおけないほどのものに向つて、身命を屠するほど眞に樂しき生活はない。然に世人は往々にして此の眞實の生活を知らず。肉慾の奴隷となりまた財慾の奴隷となる。

乍然それは眞に人生の意義を知らないものである。

□人と生れて自らを欺き又人を僞るの生活が何で眞實の生活であらう、それは生活そのまゝが即ち人生の亡びではないか。

□友よ、我等は眞實に生きねばならぬ。而てその眞實に生きるの道は只身自らをして眞の價値ある生活に此の身このまゝを活かすことではないか。そこにこそはじめて眞の宗教もある（念）

## 目次


◈煩惱即菩提　尅子
◈深信に就ての反省(一)　土屋觀道
◈悔懺錄(二四)　濱阿彌
◈白道への轉向(三)　川村二郎
◈觸光斷片(一)　大野顯道
◈吾朋便り


◈誰だつて好きで貧乏してゐる者はない、而し幾ら働いても金持になれぬ者を什うする、勿論それには社會に惡制度其人の無能力といふ事も緣因してゐるであらうが　それよりも根本的にそう云ふ境遇に置かれてゐるといふ此運命の支配こそ實に悲慘といへば悲慘の極である、金持だつて金持といふ條件が整てゐるからこそ金持で居れるのであり、其均約が破れたら直ちに貧乏人になる、そこに金持と貧乏人との差は殆ど無いと云てもよい。

◈貧乏人でも、金持になりたい、金持になりたいの願ひ一杯で働いてゐる時、其人の心は充たされてゐる、金滿家でも榮華で世榮華で其日を暮すのに苦しんでゐるやうな者は心虛しい。

◈轉到雜亂の心の中からとは云へ、一心に佛を願ふ時、直に佛になれるのである、一念即到彌陀佛住不退轉である。それと共に佛に滯るとき泥佛である、修羅道も地獄道も直に此一念に因て現ずる、貧乏人必ずしも常に貧乏人でない、一念に依て無限に轉ずるのである。

◈そこに如何なる者にでも救濟の道が啓かれてゐると同時に亦隨退の陷穽が鑿たれてゐる、如來は地獄、餓鬼、畜生一切の世界に身を變して救濟の言を成じ給ふ、極樂に安座し在ます佛らしい佛よりも、此佛らしくない無量の佛を忘れてはならぬ、貧乏人の裡に宿る金持の可能性を忘れてはならぬ。

◈無限性を裡に各々認めた時、一切は皆友である、佛もなく人間もなく、富者もなく又貧乏者もない、同時に亦人間であり富者であり、貧者である、そこに無限の希望と向上とがあつて皆々悅びの中に進化せずには居れぬ。

◈十界は宛然十界にして、而かも一佛乘に攝せられてゐる、救はれて居て無限の踊躍がある、それが南無阿彌陀佛の念佛界である。

（尅子）

# 煩惱即菩提

▽「私はもう善くならうとも、惡いまゝで良いとも其麼苦勞がなくなりました、此儘が善いやら惡いやらそんな事一切存じません、內から願望の儘左右上下自由に振舞へます、これが救はれてゐぬのかそれも知りません、私は「私」の儘に生きてゆくより外ありません。一切から離れた廣い世界があるのみです、煩惱だとか菩提だとか名ける以上に其一々が尊い力の現れです、煩胸即菩提だなんと事新らしく云ふ迄もなく既にそんな區別を認め、そして價値の高下をつけてゐたのが誤りではないでしようか。私は今や一元の世界、即如の世界に出てゐるやうな感じが致します、一つも屈託がなく無礙です、自由です、解決されてゐます。」

△「そう。本當に一切を成行きに委せ、如來さながらの生活ほど愉快な寬やかなものはありませんね、而し希望の却て來るのを待てゐるといふのでなく、此儘ジートして居れぬといふ氣分にはなりませんか、是々をしたい、是々をせねばならんといふ衰心的要求が常に湧いては來ませんか？」

▽「それは常に新しい願望が次から次へと湧いて來ます、そしてそれを完成せようと無限の力が湧いて來ます」

▽「然し、次から次へと起て來る望みの一々を充足さしてゐる丈けでは煩惱と變りません、それらの中に立てそれ等を統一し一切を貫いて無礙に伸びてゆく願心がなくてはなりません、それが無上菩提心です。願往生です。煩惱即菩提とは煩惱の起る儘でよいと云ふのでもなく、或は刹那的一々の欲望を遂げてゆくといふのでもなく、一切業を廻向しプチ込んでゆく一大成佛道が成立たなくては死んだ生活です、そこに煩腦が正定業と變た踊躍精進の本願行があります」

▽地獄は極樂の奧に在る、一度信を得たと思てゐる者にのみ地獄があります、みな極樂から態々地獄へ行くのです。

（尅子）

# 深心に就ての反省（一）

## 一、深心の意義

土屋觀道

以上私は至誠心に就て讀者と共に其の反省を促して來ましたが、茲には更に進んで深心に就ての反省をいたして見たいと思ふのであります。

そこで深心とは如何なるものであるかと申しますれば淨土に往生したいと思ふものは先づ三種の心を具へなければならない、さうしてもし此の三種の心の中、一心でも欠くやうではいかに其の他の心を以て努力いたしましても、眞實の淨土に住生はできないと云ふのが此宗の敎であります。尤も私の信する所では此の三心の中、一心でも眞に徹すれば其の他の二心は自ら期せずして其の中に具はつて來るものであると思ふのでありますが、中でも此の中の深心は最も大切なものでありまして、三心のなかの中心をなすものであります。從て此の深心さへ本當に具れば、其の他の二心も自ら此の中にそなはつて來るものでありますが、それは暫く別として、此處では成べく初信の人々にも容易に判つて頂くやうにたやすく說いて見たいと思ふのであります。

所で念佛には此の三心を具へねばならぬ、而て三種の心とは前にも申しました通り、至誠心、深心、回向發願心の三心でありますが、此の三種の心を起せば必ず淨土に往生ができるといふのであります。そして若し此の中の一心でも欠いては淨土に往生する事が出來ないと云ふのが、從來からの敎へであります。

然に深心といへば此の他にも尙その言葉がありますけれども、それは、今こゝに云ふ所の深心とは其の意味を異にするものでありますから、讀者はそのことを前おきに承知しておいて頂かねばなりません。

さて然ば三心の中の深心とは如何なる深心を云ふのであるかと申しますれば、支那の善導は之を譯して深心とは深く信ずるの心なりと說かれてあります。之は至誠心を眞實心であるとして虛僞な心に對して眞實心と云はれたやうに、深心は疑いや惑いに對して深く信するの心であると釋されたのがそれであります。乍然尙、深く信ずるの心とは一体いかなるものを如何なる具合に深く信ずるの心であるかと云ふに其の深心の內容に至りますれば、それについて善導は二種深心と申しまして、一には深く自らを信ずるの心即ち「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沒し常に流轉して出離の緣あることなし」と深く自分の機根を信ずることであります。二には深く如來の本願を信ずること即ち「斯かゝるあさましい吾等凡夫をも如來の大悲本願は念佛の衆生を攝收して捨て給はぬと深く其の法を信じて疑はぬのであります。而て普通には前者を信機といひ后者を信法といふのであります。從て我が淨土敎では之を信機信法といひ、或は二種深心と申しまして非常に古來から大切なものとして傳へられてゐるのであります。

乍然今時の舊き信者にして、果して幾人か此の最も大切なる信機信法を正しく自己に反省して眞に自らの信仰內容とする人があるでありませうが、疑はしいものであります。尤も今日の多くの宗門の學者若くは少しでも我が淨土敎の何物たるかを承知した人々には恐らく一人として此の深心の說明を知らない人としてはありますまいが、乍然是等の人々と雖も果して眞に此の深心の持主として自らの機根を信じ如來の大法を疑はないものが幾人あるでありませう。之は必ずしも絕對に無いといふのでありません。乍然斯の如きの人々は今時の信者に於て甚だ少ないと言はざるを得ないのであります。而て又かくの如きは單に、之を人にのみ求むべきものではなくして、直に各人各位の自らの信仰に深く反省して見るべ

きであります。即ち自分は果じて罪悪生死の凡夫であるとの心になつてゐるのでありませうか。換言すれば所謂導師の「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より次來常に沒し常に流轉して出離の緣あることなし」と眞に自らを信じ切てゐられたやうに、果して私共も此の信機の心になりきつていることでありませうか。然に私共はともすれば自らをあざむき惡人どころか反て此の身を善人であるかの如くに思いなして、人の罪のみを裁く氣になつてゐるではありますまいか。乍然之では如何に念佛してもそれは深心の念佛ではないことになりませう。これ私が日頃から讀者と共に深心の深き反省を促す所以であります。從て此の反省のない人はともすれば自分の僅かばかりの信仰を誇りとしたり、或は自分の少しばかりの善行を誇りとすることによつて反て深心の念佛を失ふことになるのであります。もとよりどんな淺間しいものであつても捨て給はぬが如來無限の大悲でありますけれども、かゝる心得違いの人々はいづしか信仰も慢心の姿となつて、しみじみ如來にすがる心も失せ、南無の心となれない爲に遂に眞の念佛にもならないことになるのであります。從てかゝる心の人々は所謂永生の心も誤まつて眞に解說の時期も失ふことになるのであります。

從つてかゝる時私共の之等に對する眞實の態度は時としては、それらの爲めに一時世間の誤解を招き或は又一層それらの爲めに深き迫害を受けることがありましても嚴然として之等に反對するといふことは、或る場合反て之等の人々の爲めにも、その誤を反省せしむる上に於て決して辭すべきことではありませぬ。

それにつけても眞實の宗敎は必ずしも其の人を徒らに喜ばしむることのみが能ではないのであります一時はよしそれの爲めにたとい身命を失ふやうなことがありましても、これらの若難を甘受して自ら眞實の大道に立つことが、反て眞人の生活であります。而てそれこそ眞に又人類の理想であり、これが又如來の大道であるのであります。菩薩の大願大行といふことも此の道の外には無いのであります。否かくの如くありてこそ眞に初めて私共の生活も意義があり、それが價値ある宗敎でもあるのであります。

乍然ともすれば私共の心の奥底に潛める此の淺間しき心は此の心からなる眞人の願望を裏切つて、反つて自らの貪慾を充たすことに走るのが常にあります。否それどころではない、時としては之れが爲めに反て眞人の生活を防げ、或は聖者の生命をさへ殺傷することがあるのであります。

之をしも淺間しい心といはずばこの他に何をか淺間しい心と申すものがありませう。これぞ惡魔の心であります。されば若も私共の宗敎にして此の自らの煩惱を戒め、又この不德に對して眞に何等かの反省を試むることがないほどの宗敎ならばそれは惡魔の宗敎であります。然にともすれば我が念佛信者と いはれる人々の間に於て、かゝる人々のあるとこは最も反省すべき所であると共に亦各自お互にも此のことの無いやうにと最も注意せなければならない所であります。

さうしてかゝる無懺の人々に限り、多くは徒食の人々が多いのであります。從て自らの生產によつて眞に生きやうとするの心なき人々であつて、多くは其の日を徒勞に過し、たまたま働くと申しましても恐らくは人の働いた多くの利益を自分獨りで横取りしやうとするの人々が多いのです。いはば自らの働きによつて自ら生きやうとするの眞の心のない人であります。從てかゝる人々は己に自らの價値に於て其の生命を亡ぼした人々でありまして、生きてるかいのない人々です。而も斯かる人々に限つて又世間多くの人々の幸福をさへ防害してゐることを知らぬのであります。

凡そ信仰に限らず何事にしましても、自らどんなに進んで居ると思つても、それが事實に於て其の通りでないならば、それは單に其の人がさうだと思い違へてゐる丈けのことでありまして、如何にその人

が力んでみてもやつぱり其の人の力はそれ以上には出ることができないのであります。然に世人はともすれば此の眞實の道理をも知らないで、僅かの自分を誇らうとするものが多いのです。乍然かゝる虛僞なる行動が果して眞人の生活に幾何の價値をか持ちうるものでありませう。さうしてそれは單なる自分の虛榮であつて寧ろ哀れむべきの行爲であります。然にともすれば今時の信者と云はれる人々の間に於て此の種の人々の往々にして發見せられるといふことは甚だ遺憾に堪えないことであります。

ところで話はもとに歸りますが然ば何故に私共はかゝる深心の反省が必要でせうか。又何故に深心の欠げた人々は往生することができないのでありませう。尤も此の事に就ては、己に深い信仰の人々には何等之に對する深心の反省もいらないことではありますけれども、若少しでも身自らを善人となし、人を眺めて惡人とでもする程の心ある人々は最も深き注意を以て自分自身を反省せなければなりますまい。從つてかゝる考への人々には眞に自らの罪惡に目醒め、生死の凡夫であることに氣付かない限り到底如來の大悲に直入することはできませぬ。　何となれば自らの罪惡に目醒め生死の凡夫であることに氣付人にして初めて如來大悲の本願にも歸入することができるからであります。されば茲に私共が自己の罪惡に目醒め、自己の生死の凡夫たることに氣つかせていたたくことは、單に私共の嬌慢の心をくじき、又これによつて更らに自らの向上を計るべき、深き反省の爲めばかりでなく、更らに進んでは之によつて直に如來の大悲本願に轉入せしめんが爲めであります。而して之が如來の大悲でありまして、又之あるが爲めに如來への信法も强く顯はれて來るのであります。　八月二十一日御殿場大乘寺に於て）

# 懺悔錄

廿四

演　阿　彌

常に忘られず恒に戀しき私の如來樣よ。翌れば大正拾年一月であります。全法界の父で在しますアナタの聖道に一生を捧げ玉ひて然も愚かなる私達を慈しみ懇ろに敎へ導いて下すつた故御聖人樣はもう既に常恒餘の涅槃に入られて一ヶ月を經過致しました。茲に私達は其悲みを新たにし而して其慈恩と及び今後の責任とを追懷すべく追善の別時會を迎山と稱する念佛草庵に營んだのであります。此處は東海第一の景勝の地であると共に冬尙ほ氷らぬ溫い山懷ろであります。Y市のY樣が信仰に入つたのも此時でありましたが此一週間に於ける上人の御法話は何時もよりも一層强く私達の自覺に就て詳論せられたかと思ひます。同じく解脫道と云つても其要求や其目的が所謂聲聞道緣覺道菩薩道佛道と展開致しますが、其敎相的說明よりも我が脚下の大道如何が大切であらねばなりません。即私達が現に希求し現に經驗しつゝある自らの意志活動の中心點が何れに有りやが重要であります。かくの如き反省の中に然も熱烈火の如き御話は實に何時も乍ら上人の獨壇場であります。此故に私達は單だ醉へるが如く而も安かに而も力に充ちたる法悅を味ひつゝスツカリ聽惚れて仕舞ました。佛法味を愛樂する處、其處には滾々として盡きざる喜びがあります。私は餘りの嬉しさに他の二三の方々に其御感想を御尋ねして見ましたすると「御話が自分達の聞かんとする要求よりも非常に懸け離れて居るのでちつとも判らぬ」と云つて居られましたので心ひそかに悲しく思つたのであります。少くとも一度道心を起したなら誰人も領かねばならぬ此唯一佛道が何麼して私達の願に懸け離れて居るでせうか。厭離穢土欣求淨土の心は直ちに上求菩提下化衆生の望みであります。然らば淨佛國土若しくは成就佛國土の願行が自分の問題として如何に有る可きかと云ふ自覺上の心理と論理と哲理とが何故判らないのでせうか。噫々、思へば本當に「易往而無人」の歎に堪えません。併し考へて見ますと夫も無理からぬ事です。

私の如きも亦た頗る鈍才にして初めの内は何も判らなかつたのでありました。佛性の存する限り如何なる人も一度志だに起せば了々として明燎なる事ですけれども悲しい哉無明の谷深うして菩提の山嶺を望むに由がありませんのです。宜しく勇猛に精進して刻々靈性を磨かば立ち所にミオヤの大慈悲を感得して然かも其大慈悲に添ひ奉るべく大膽に勇猛に無上道を志求す可きであります。さるにても此七日間は本當に惠まれたのでした。私は此時不圖少さい事乍らも始めて落着きと云ふ事を知つたのであります。元來私はかなり短氣で何事も着手した限りには氣狂ひの樣に一途になつて或點迄專心一意堀り下げて行かなくては承知の出來ない性質を持つて居ります。或る友は私の此性質を批難して忠告して呉れましたが本當に之は私の短所であると同時に又た長所でもあるかの樣に思ひます。夫が此別時會の半ば頃からドッシリと落着いて仕舞つたのであります。或は靈感を得んとし或は三昧に入らんとするが如きは抑も末の問題であつて己が信仰の實力だにあらば天地自然の道理としておのづから求めずして得らるゝ事を知つた私は自然に落付きが出來て御念佛は益々力强くなり然も心泰然として亂れなくなつたのであります。然し乍ら此落ち付きが出來ると同時にまた一方に弊害も出て來ました。夫は何だか他の兄弟達よりも自分の方が上の樣な氣がして所謂總領氣分になつた事であります。無論輕蔑など云ふ卑むべき心は起りませんでしたが何となく嬉しく何となく自惚れて來ましたのは本當に低級な凡夫心の然らしむる處でありませう。かくの如くして二月も過ぎ三月も過ぐるに從つて茲に又た私の生溫い心の透間から懈怠の惡魔が附け入つて來りました之は誠に恐ろしい重大事であります。本當に熱心でありました私が少々兄樣氣取になつて來ると私の惡質が惡魔と妥協して段々懈怠に成て來たのであります。一二年この方夢を見る事も少なくなりましたが其見る夢の悉くが皆な念佛に直接してゐるので、我心の奥底にはまだ中々に熱心さの失はれて居ない事を知るのではありますが、今ま私の成佛道に於ける唯だ一つしかない念佛の行が漸々



に退轉せんとする事は誠に愁しい事であります。實際行不足より生ずる無意識的不滿足感が段々恨みとなり惱みとなつて行くのは當然であります。茲に此の願行不相應の矛盾に對する苦痛が私の上にも段々意識的に深くなつて行きました。是は餘程用心す可き事だと思ひます。かくの如んば私も亦た終に一生不徹底で終る事は火を見るよりも明らかな事であります。衆生無邊誓願度煩惱無邊誓願斷法門無盡誓願知無上菩提誓願證の四弘誓願が何時貫徹せらるゝでせう。人生の眞意義を悟り本地の風光にちらと乍らも証入し乍ら然かも徒らに空しく自らを腐らして仕舞ふは本當に腑甲斐ない事であります。然も其腑甲斐無さを知れば知る程、專心念佛になり切る樣に勤めねばならぬに拘らず其の撰擇本願の行を懈怠して而も其矛盾に惱むと云ふに至つては實に呆れ返つた愚か者ではありませんか。否な是れ明かに私の立志が本物でなく私の証入が淺墓のもので有つた事を示して居るのであります。吾畢竟何者ぞ、眞實に我本來の面目を知り得たならば快刀亂麻を斷つ如く一切解決でなくてはならぬのに或は自分を買被つて見たり或は懈怠に流れんとしたりするのは本當に悲しい事であります。プラトーが云ひました「人々は大に何か爲しつゝあるつもりで居るが其實何もしては居いのだ」と、本當に然樣だと思ひます。或は身体の生きんが爲めに或は名と利との爲めに熱心に働いたとして結局一生に何が殘るのでせう。死の巖頭に立つて過去を顧みた時「噫々一生が無價値に了へて仕舞つた」と血を吐くが如き痛恨があつても夫はもう駄目です。然るに「念佛は大切だが食ふのも助業の一つだから」と助業の言葉に暗まされて眞に生命の尊さを忘れんとするが如きは余りに淺間敷い心では無いでせうか。私達が朝起出でて念佛の中に如來の靈化を受け其淸まつた心を失はずに刻々に作佛度生の願行を增進して行く時眞實に「資生產業皆是佛道」が体現されて行く可きものを其根本を忘れて末に入り終には其枝末を依處として一生を終るが如きは明らかに靈化の實を認識して居ない事を立證して餘りあるものであります。然かも念佛は一息毎に眞實に生きんとす

る所の行なるに於てをやであります。私達の一息一息が如實に價値を自覺して行く處、其處にのみ眞の滿足があります。然して現に私達の生活が一息毎に如實に生きて居ない事實を知る限り尙更如來樣に祈らざるを得ないのを逆に益々離れんとする事は全く矛盾ではありませんか。かくの如く私の日常に於ける一擧手一投足の端々を能々反省しますれば本當に淺間敷いものであります。一方菩提の道に目醒めて居乍ら一方從來の惡習慣が取れないで私の爲す何事も唯だ單なる享樂に惑溺して居りはしないかを反省したいものであります。私達人間のする飲酒や喫烟や食物や其他一切の慾は皆な有限の消え行く物なるに、然も夫に執着し夫に享樂して居る事實は實に耻づ可き大惑業であらねばなりません。否な爲す事其物が惡いのでなく爲し行く心理が恨めしいのであります。私に與へられたる刻々の其瞬間々々果敢無くも無殘に其眞價値を沒却せしめつゝ過ぎ行かしむるは私の一生に受返へす事の出來ない最大恨事であります。是故に私としては此の心を踏み破り蹴破つて渾身の精進全心の力を以て益々深く無上菩提の道を進まなくては本當に死んでも死に切れない事であります。かの法性禪師が「此身今生に向つて度せずんば何れの生にか此身を度せん」と云はれた其眞劍な言葉は本當に操返し學ぶ可きものであります。然るに今ま私の目前には解說の大道が展開され然も乘る可き船は艤裝されて待ちに待つて居るに拘らず尙逡巡として尻込んで居ると云ふ事がある可き事でありませうか。此の有る可らざる事が私の上に現はれて居ります。かくの如くして私の一生は空しく終りを告ぐるならば本當に譬へ樣もない恨みであります。善導大師は言はれました。「樹を伐らんには切りに斧を下さゞる可らず。家に還らんには苦を辭する事莫れ」と。是れ正に今の私に於ける一大痛棒であり一大敎訓であります。どうぞ如來樣よ私をして永遠に精進ならしめ玉へ。

（續く）



# 白道への轉向（二）

川村二郎

處が二回三回と御講話拜聽の席を重ねますに從ひ、不思議にも前述の私の不滿と淋しさとが漸次消散し去るのでありました。而して俄かに春の陽氣に誘はれてシン〳〵と木の芽が萠ね出る樣に、私の信念が非常なる勢を以て延び出して來たのであります。即ち私の稱へまする念佛により言ひ知れぬ喜びの心が私の胸底から湧き出るのであります。而してその念佛が頭上から壓迫されてゐました障碍物を突破して大宇宙に向つて響き渡るのであります。大經を拜讀して見ますと、爾の時三千大千世界六種に震動すと言ふ事がありますが、私の念佛が丁度大千世界を震動せしめる樣に感ずるのであります。私はこの時非常な愉快さと嬉しさとを禁じ得なかつたのであります。慶ばしき哉愚禿親鸞心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法界に流すとお喜びになつた親鸞上人の御言葉を今更の如く有り難く感じたのであります。

次にまた私は如來樣が眞實の親だと言ふ事をはつきりと氣付かして頂きました而して丁度子供が親を慕ふが樣に如來樣が本當に慕はしくてならぬ樣になりました、私が如來樣の御名を稱ふ時如來樣もまた直ちに私の胸に現れて下さるのであります。上人樣は信仰は丁度戀人に對するが如しだとお仰せになりました、あの御言葉は眞に適切に感じました。お互に了解し各つた二人の中なればたとへ、いのちまでもと言ふところに眞の生命があるのだと存じます。如來の名を呼ぶ事により自分の生命が生き〳〵と躍動せぬなれば其處に何の宗敎的價値がありませうか、今私が南無阿彌陀佛々々と稱名する事により直ちに如來の大精神に觸れ今迄沈滯してゐました私の魂が勃然と復活し出して來ました、この體驗的信念こそ眞に私には無限の喜びなのであります。

私が醫學生時代に或る眞宗の坊樣からこんな事を聞かされた事があります。君等は極樂々々と言つて極樂行ばかりを願つて居るんだね所謂極樂病に罹つて居る。それよりは先づこんなつまらぬ奴

を極樂へやつてやらふとお仰やる如來樣の御恩を思はぬかい、家督息子が親の財産ばかり目當にして喜んでゐたなればどんなものですか、それよりはまづ親の御恩を思はなければならぬと。今から考へて見ると隨分變な考へ方であつたのです、眞實子供が可愛かつたなれば御恩を思へ御恩を思へと言ふやうな馬鹿な親はないと存じます、實際親としてはそんな恩なんか思つて貰ひたくはないのであります。それよりはお父樣、お母樣と慕つて來る子供の方がどれ程嬉しいか知れないのです、また子供としても御恩有り難や御恩有難や等と御恩ばかりを思つて眞に親を慕ふの念がなかつたなれば心からの滿足は絶對に出來るものではないのです何もそんなに御恩々々と言はなくつても親だと言ふ事が氣付かれたなれば其御恩も自然思はれてくるのです。私にはまだ本年七十四才の父と六十六才の母とか健在ですが、年に一度や二度は必ず遊びに參ります、而して私が健康で働いてゐますのを見ていかにも嬉しそうに滿足したと言ふ樣な風で歸つて行きますが、未だ嘗て親の恩を想へ



等と言ふ樣な事は一言も半句も口に出した事はありません。而してまた私もこの老いたる兩親が何となく慕はしくつてならぬのです而してまた慕ふ事により私の魂は常に生かされてゐるのです。この意味に於て私は法を說かんとする者は宜敷一切衆生皆是我子也との如來の御言葉を眞に徹底せしむべく努力せなければならぬと存じます。

上人樣は常に如來樣に靈化されると言ふ事をお仰せになりましたが、私には初め頓と其處に何等の宗敎的價値を見出さなかつたのです、何故なれは私は唯念佛して彌陀にたすけられまいらすべし(往生極樂の意)であつたのでありますから靈化されやう等とはてんで初めから問題にしてゐなかつたのです。然るに廓然として其處に尊い言ひ知れぬ意味の含まれてゐる事を發見いたしたのであります。即ち上人樣は唯往生極樂と言ふばかりでなく現在の一念が直ちに如來樣の大精神に觸れんとせられるのでありました。私は往生極樂を前に見て、大悲矜哀の中に安住し喜んで日暮しをして行くと言ふので有りました。故に其處に信仰上の隔りが生じますのは當然の理であつたのであります上人樣はあなたの信仰ばまだ足りないとお仰せになりました事も御尤もの次第であります。

以上は私の信仰の進展の經過を大略申し上げたのでありますが、要するに私は全く上人樣の信仰を誤解してゐたのです、即ち自力の念佛だと直感いたしましたのは上人樣が眞に如來を慕はれまする熱誠の溢れでありまして然もそれによりて一念々と靈化されて行かれる尊い御姿であつたと言ふ事に氣付かせて頂いたのであります。次に第二の疑問即ち滅罪の爲めの念佛だとか、臨終正念だとか言ふ樣な事を自然氷解したのであります、而して今や私には上人樣の信仰に對し何等一點の疑念もありません。また私の信念をはつきりいたして參りまして恰も赫々たる天日を仰ぐが如くであります。斯く私の信念が展開いたしまして眞にその骨隨にまでも達し得たのは全く上人樣の御指導の御賜物と深く感謝いたす次第であります。

終に臨みまして聊か私が我が高宮光明會の爲に私の希望を述べて擱筆いたしたいと存じます。以上の如く私は始めて上人樣の信仰に對し誤解をいたしてゐました一人でありますが、或ば他の道友の中にも私の如き或は他の意味に於て上人樣を誤解してゐられる方がありはせぬかと存じます。或は一二席の講話を聽いてそれでよく了解したかの樣に僕はもうよく解つたからそう何度も聽く必要はない等とお仰やる方もありますが、私はこれ等の方が眞に如來の靈光に觸れた方なりや否やを疑ふのであります。また仄聞しますに、上人樣の少しの御言葉の過激なる點より直ちに危險思想だのいや社會主義じやの等とお仰やる方もあるそうですが、私はこれ等は誤解の最も甚だしきものと存じます。何故なれば宗敎的信念なるものは倫理道德乃至は法律上の範圍よりは遙に超絶いたして所謂絶對性を有してゐますから、假令倫理道德の世界に往む人達より脫線的言辭の如く解せるゝ事がありましても信仰上から見れば少しも危險でも過激でもないのであります。却つてこれを危險と見るのがどれ程危險か知れないのです、信仰は凡ての思想などに束縛を受けないのであります、即ち

光碍の一道であるからであります。彼の念佛禁止の法令が出ても尙かつ、

つまらぬことに心をいためて出世の本懷を忘れてはならないよ、この世に人間となつて生れることは百千万劫を經るとも容易にあび難いことぢや、このあひ難い人間の身をうけあひ難い本願にあひ、おこし難い道心を起して、はなれ難い輪廻の里を離れ、生れ難い淨土に往生することはよろこびの中のよろこびではないか。おゝわしは、だゞ念佛してみ佛のお救ひにあづかるそれのみがこの世に生れて來た唯一の本懷ぢやわしは死刑に處せられても、念佛を申さねばならぬ、さあみんなも念佛を申してくれ。この世の中には何も恐れることはない南無阿彌陀佛、

南無阿彌陀佛……」

と、ます〳〵念佛を宣傳せられました法然聖人は法律上から言つた大罪人です、然しこんな法令位にびくともせられなかつた處に信仰の信仰たる點があるのであります、然るにこの法然上人の思想に對し危險思想だの、社會主義だのと言ふ人があつたならば其れこそ誤解の甚だしきものと言はねばなりません。

上人樣が或は倫理や道德を蹂躙せられたかの樣な言辭を發せられたかは存じませんが、然しこれは前述の意味に於ける大なる誤解でありますから今後上人樣の御指導の下に道友諸君の信仰が漸次向上すると共に自然氷解する事と私は確信して疑はぬのであります。どうか、今後も益々我が光明會の爲に上人御得意の堅實なる論鋒を以て悉くこの大果に導きたまはん事を偏に御願ひいたして置きます。

（一三、六、一五記）

前回の訂正不審議ハ不思議、展廻ハ展開の誤り。

觀道申す。私の話が過激に聞ゆるのは其の人の頭がノロイからです全人類の自覺と幸福の爲めの私の叫びが社會主義ならば社會主義ほどこの世にすきなものはない。親ゆづりの財産で一生遊ぶほかに道を知らないナマケ者や人の働いた利益を横取するような横着者には私の言葉が危險に聞ゆるのも止むないことです。乍然かゝる生活の人々ほど人類の文化と社會の幸福を妨げるものはありません。して見れば社會を害する危險人物は反てかゝる人々ではありませんか。私の願いは全人類の自覺は其社會の幸福の生活です獨り有産階級の專横や無産階級の獨占は私の採らない所であります。

## 觸光斷片（一）

◇

生産の無い生活は生きがひのない生活である、物質的にしろ不斷に創造擴大されて行く生産はそれが正しい場合にのみ賴母しい而しパンのみに依つて生くる者でなく神の言葉に依つて生きる事の幸福を得る人間は畢竟精神生活の生産さるゝ時初めて眞の喜びと幸福を得る、自由の働き、自由に遊び、自由に憶想し、自由に語り自由に祈る。

◇

親に育てられたり、亦生活の保証を受けてゐる間は方便示現の慈悲が有難く感得さるゝ、而し佛本懷の本願は此に止まるものではない、されば親におぶさつたり、手を曳かれたりして成長した搖籃の慈悲を過程としてすぎてこそ初めて獨立自活に入り得るのだ、自らを提げ終日額に汗して自由な一片のパンを得た時に本當のあふるゝ喜びを味ふこれぞ乘佛本願の眞義が自己に覺めたる額の汗に慈悲の輝きとして光つて居るのだ。絶對無限の如來の慈悲は一人子の眞實に向つての生長にある。

◇

徒に拜む信仰や唱へる信仰は本物でない、拜み倒したり口眞似だけで之足れりとして慢ずるあり、之尊い人生の最大なる冒瀆でなくて何であらう、何の爲めに拜み何の爲めに唱へるか、信仰の對象を闇中模索の中に遂に定め得ず迷の中に迷の佛を遂ひ廻る事から反省やねばならぬ。

拜まれるべき佛が拜む人の人格に顯れて來る樣な佛を拜む信仰であらねばならぬ。

◇

文化とは價値と生長する生命とを目標とするものでならねばならぬ、若し價値と生命とを文化の內容から取除いたならば文化の權威とその正しさを欠く、文學に於ても哲學に於ても亦一切の社會運動に於ても殊に宗教に至りて然りと云はねばならぬ、若し前述の要件を欠くならば宗教は迷信に陷り、生氣なき屍に過ぎぬ。

◇

思つたり考へたりして居る間は本質的に自分の「モノ」になり切らない、信仰は事實だ概念ではない南無阿彌陀佛と唱へたから得られるではない、南無と歸命する當体に既に得られてゐる。

◇

時處所緣を簡ばずその儘で只管永遠に希仰し合掌の生活に生きて行くこそ眞生なる宗教人である。

（八、二〇）（顯）

# 吾朋便り

◈信州　長澤嘉一郎様。

初めて御目にかゝりまして或は多くの人々に對せらるゝ遙か以上の溫い御情に包んで下さつたのではあるまいかと思いますれば何と言てよいか御禮の申上やうがございません。御同行の人々からもおなじ思いで遇せられてほんとうに嬉しうございます。――少くも唐澤山の四日は短い時ではありましたけれども淸く尊く眞劍な一生を送ることが出來るならば悲痛も忍びませう苦患も受けませう涙の中からも喜悅の情を認めませうと思つてゐる私には得難い有意義の生活でありました。

◈大阪　樽本ヒサ子様。

今度有がたき御緣により親子のものを三昧會に入れていたゞきましたことを心から感謝いたしてゐます。あの同行の方々の御修養の程全く感心いたしました、歸りまして早速家族や親しき人々にも右の事狀を說き聞せて共々に如來樣を中心とした生活を續けるやうに計らいました。

◈大阪　高田シマ子様。

御上人樣の熱烈なる御指導により始めて夢よりさめし意持致しました私の喜びは申上やうも御座いませぬ。――又秋には嬉しく御面會できます事と今より樂しんで御待ち申してゐます。

◈柏崎　宮川くら子様。

山から無事に歸りまして主人と共にそのお話をいたしましたら、主人は實に愉快だ〳〵と申しまして

それでなくては此の世界を目醒すことはできぬよ丁度よい時に神から命じられて心に適する大なる感じを與へられて御許は幸福だねと眞に大滿足でした私の其后も言語につくせぬ喜びの中に日暮させていたゝいてゐます。

◈神戸　鶴田昌造樣。

御上人樣、四名（關浦、森田、藤村鶴田）から各々御禮狀差上ねばならぬので御座いますが失禮ながら代りて私から此處に御挨拶申上げます。私は御山が如何ばかり結構な所でありますか存じませんでしたが御上人の熱烈なる御信仰によりてキット四名共歡喜して歸宅するに違いないと信じて居りましたか果して非常な悅びを以て歸つて來ました。まことに有難く御禮申上ます。ほかに申上げる事は御座いませんたゞ御禮丈けですそしてひたすら眞實に進ませていたゞくだけです。

◈浦賀　山田英子樣。

仙境唐澤にて三昧會も御終り被遊ました由乍蔭共に御念佛申て居りました。さぞかし皆樣始め母も一層淨化された事と存じます。

◈新潟縣　原トミ子樣。

本年の三昧會もなか〳〵に御集りがよく六十名近くであり皆々樣が實に眞劍でありました、御上人樣のあの尊い御說法むねをいぐらるゝ樣な御敎化を受けるにつけ扨て平素の自分をと顧みればなんといふ罪深きあさましき者かとやるせない思いの涙の外何とも言葉につくせません。かくまでに衆生の爲め心身をさゝげて御つくし下さると思へば涙の外ありません。大慈悲の御惠みによらねば生きて行かれぬ此身一生懸命に大慈悲の御旨にかなう樣な者にしていたゞきたいと念して居ります。何卒御導きのほど願上ます。（土屋美和子へ）

◈名古屋　百々治之助樣。

唐澤は豫想外の結構な所實に筆紙に盡せない感でありましたこれも如來樣の恩寵御上人樣の御引立と深く感銘致す所であります。又道友の皆樣のあれ程の御熱心は實に驚くべきことでありました。それにつけて今后益私共にも精進せなければと覺悟さしていたゞいたことを心から感謝いたして居ります

◈岐阜　行基寺樣。

本年の唐澤の三昧會に參加せざりしを殘念に存じます最早別時も終了御歸京のことでせう。然に此地今度青年團在鄕軍人を中心として修養會を起し不計も私が會長として毎月第一日曜に集つて御話することになつてゐます。就ては此の秋にもなりましたならまけて一日でも御立よりの上右一席の法話を願上ます。若も少しても此の期會に於て彼等青年の前途に如來樣の慈光が輝くことができまするならばまたなき私の喜びであります。

◈御殿場にて　觀道

大阪に於ける大寶寺上人の御遷化に續いて又四日市の道友中野新兵衛氏を去二十八日の朝に逝かれましたことを併せて道友の方々に御知らせいたします。色々と御他界の有樣を承はるにつけても右御二人の限なき慈光裡中の往生を尊い私共への御敎訓であると感謝せずにはゐられません。共俱に心から御回願いたしませう。（八月廿三日）

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十三年八月二十九日印刷納本大正十三年九月一日發行（毎月四日發行）第三卷第九號

# 大正十三年度唐澤山別時講錄發刊に就て

別時三昧會に於ける上人の講錄を印刷して私達の參考に資したいといふ事は年來の望みでありましたが速記の術を知らないので何時もそれなりになつて居つだのであります。處が靜岡の藤井先生が此度の唐澤三昧會中上人の日々三時間乃至四時間に渡る御法話を熱心に筆記せられました。無論速記でなく唯だ大要をつまんで書いた百頁斗りのものでありますが拜見しますと、再び唐澤のあの時の光景がまざまざと眼前に現はれて何とも云はれない氣分になります、速記にしたら恐らく數千頁にならふとする法話をあれ丈のものにツヽメられたと云ふ事は一に熟練の結果とは云へまた大に熱烈なる信仰心の然らしむる處と推奬せざるを得ないのであります。このまゝでは多少缺けた處も無いではありませんが之を此儘筐底に隱沒せしむるも遺憾でありますし且つ私達年來の望みの一部分を果たしたく、今度上人の懇切な校閲增補を乞ふて印刷に附したいと思います。題して「價値の宗教」と申しますが別に資金があつて出版する譯でありませんから大体豫約部數を數へて見たいと思ひます。ハツキリは判りませんが一冊實費四五十錢には出來樣かと存じます。どうぞ護法の爲め且つ菩提增進の爲めには高等施本用として多少に係らず御豫約下さいませ、部數が多ければ多い丈安價に出來ますから他の方にも御勸誘下さいます樣御願致します定價は部數が大概判つた處で定めませう。

一、申込期限　三十日迄

一、申込所　東京市清水市清水實相寺又ハ東京眞生社

右代表發起人　中村辯康

## 寄贈並誌代拂込芳名

寄贈の部

○金拾圓藤田寛隨先生外廣瀨先生　松濤先生島田先生　一〇、〇

誌代の部

○參圓片岡利藏樣○金貳圓五拾錢　寺倉英逸樣○金貳圓古座谷武兵　○衛樣長谷川嘉兵衛樣大野蓮教　樣石山清吉樣金壹圓松谷眞淳樣　江間清一郎樣須藤富夫樣　一九、〇

定價一部十錢　半年六十錢　一年一圓
振替口座東京四七二八八番　眞生社
編輯兼發行人　東京市芝區芝公園第十四號地九番　土屋觀道
發行所　東京市芝區芝公園第十四號地九番　眞生社
印刷人　東京市芝區三田四國町二番地三號　三井清次
印刷所　東京市芝區三田四國町二番地三號　玄々堂印刷所